

令和6年度岩手県障がい者相談支援従事者初任者研修

【講義4】

相談支援に必要な技術

東北福祉大学総合福祉学部

狩野 俊介

本講義の概要（標準的な研修カリキュラムより）

獲得目標

本人を中心とした（本人の選択・決定）支援を実施するにあたり，獲得すべき支援技術について理解する。

内 容

- ミクロ及びメゾレベルからマクロレベルに焦点を当てた視点等を含む地域を基盤としたソーシャルワークの理論と基礎的面接技法及びコミュニケーション技法を含む相談支援技術の基礎について講義する。
- ケースワーク、グループワーク、コミュニティソーシャルワークの各技術、カウンセリングやケアマネジメント、ネットワーク、コンサルテーション及びスーパービジョン等の相談支援に従事する者として獲得が必要な支援技術について理解する。
- 実践研究などによる経験から学ぶ省察的思考の必要性について理解する。

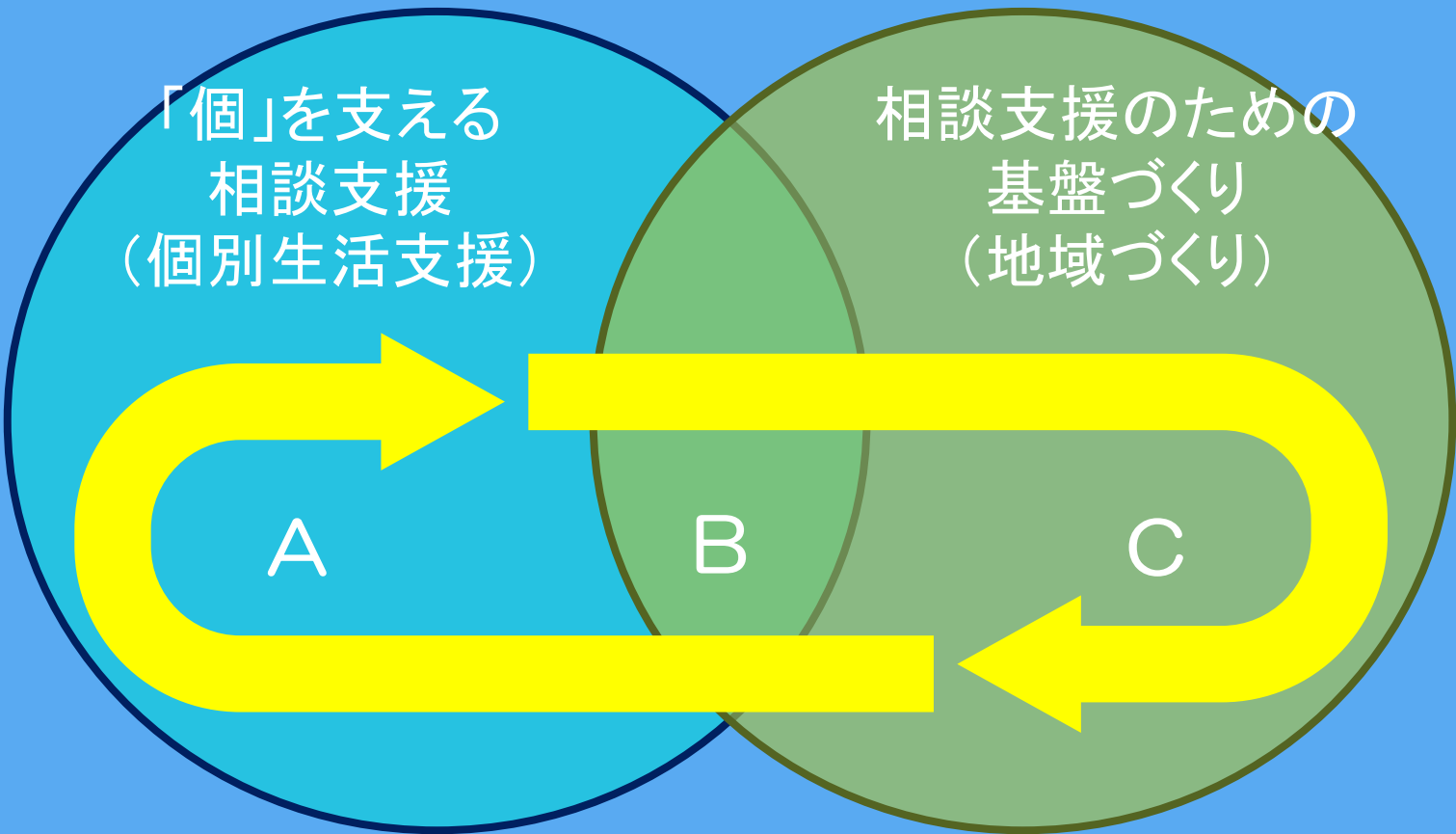
相談支援専門員とは（確認）

相談支援専門員は、障害児・者等（以下、利用者※）が自ら望む自立した地域生活の実現に向けて、本人の意思、人格ならびに最善の利益を尊重し、常に本人の立場に立ち、個別生活支援と地域づくりを両輪とした相談支援を実践するソーシャルワーク専門職です。

※ 利用者：障害児・者本人及びその家族のほか、障害に関わる課題を有し相談支援専門員による支援を必要とするあらゆる人を指し、障害者総合支援法等における障害福祉サービス等の利用者に限定されるものではありません。

引用：日本相談支援専門員協会HP【定義】

相談支援専門員による相談支援の実践



A: 利用者(個)の生活を支える相談支援(ミクロ)

B: 利用者(個)を支える地域資源・ネットワークをつくる相談支援(メゾ)

C: 相談支援のための地域基盤づくり(マクロ)

ソーシャルワークに必要な技術

ソーシャルワークに必要な技術※1	本講義で扱う内容（順不同）
データ収集・診断的技術 ；アセスメント技術	アセスメントの技術 マッピング技法(ジェノグラム, エコマップ)
面接技術	基本的面接技法 クライアントにかかわる上での姿勢
介入技術	意思決定支援の視点
記録の技術	記録の意義・目的 実践研究（事例研究）の意義

※1 Kadushin, A. & Harkness, D.(2014)「Supervision in Social Work(5th edition)」

相談支援に必要な技術

面接技術

ソーシャルワークの対象は、個人、グループ、コミュニティのいずれであれ、その基本に「人に向かい合う技術（視点、姿勢などを含む）」が求められる。

以下の数字は、何を意味するのでしょうか。

30 %

ソーシャルワーカーとクライアントとの関係性

ソーシャルワーカーの支援的介入の効果に影響する要因

- | | |
|--------------------------------------|-----|
| ①クライアントまたは支援以外の要因
(注: 支援者の影響外の事由) | 40% |
| ②支援者とクライアントとの関係性の要因 | 30% |
| ③クライアントが支援に抱く希望、期待の要因 | 15% |
| ④理論モデルに基づく方法や技法の要因 | 15% |
-

面接とは何か：日常会話との違い

	日常会話	ソーシャルワーク面接
目的	話したいことを自由に話すため、話題は幅広い	明確な目的をもち、目的を達成するために行う
責任	会話がうまくすすまかい場合でも、どちらの責任でもない	ソーシャルワーカーはクライアントに対し、意図的に働きかけ、面接の目的を達成する責任を負う
役割分担	話し手と聴き手の役割はあいまいで、自分が質問されたら同じことを相手に問い返すといったやりとりが、マナーとして実施される	ソーシャルワーカーとクライアントの役割は明確に判別され交代しない。ソーシャルワーカーは専門職としてクライアントの課題解決に役立つようにかかわる
計画性	特に計画して実施されるのではなく、いつでも自由に話したいときに会話する	面接は目的達成のために意図的・計画的に実施される
義務	会話は義務ではなく、それぞれが話したければ会話する。一時的に共通の話題がある人と会話を始めることが多い。会話を終えるタイミングも自由である	ソーシャルワーカーはクライアントのニーズに応じて面接し、課題が解決する、もしくは解決できないことが明らかになるなどの終結に至るまで、面接を継続する義務を負う
互いの関係	自由に話すが、話す量が同じくらいになるよう互いに配慮することが礼儀とされている	ソーシャルワーカーはクライアントがより多く話せるように意図的にかかわる
機会の設定	時間や場所の予約が必要なく、それぞれの都合で自由に開始し終了する	約束された時間、期間、じゃまされない場所での実施が原則。どこで実施されるとしてもソーシャルワーカーが意図的にかかわることで面接になる
取り扱う事柄	通常は楽しみに会話することが多く、相手を不快にさせないように気を配る。個人の意見などを自由に述べる	必要に応じてクライアントにとって不快な事柄も取り上げる

非言語的面接技法

表情

- ✓ 表情は、相手に対する思いやりや心配など、さまざまな気持ちを伝える手段となる。
- ✓ 表情と言語内容を一致させて伝えることが不可欠。また、表情の読み取り違いが生じることにも留意が必要である。

視線

- ✓ 視線を適度に合わせることで相手の話を促すこともできれば、視線を合わさないことで相手を無視していると伝えることもできる。
- ✓ じっと見つめることで相手を緊張させたり、不安にさせたりすることもある。
- ✓ 適度に視線を外したり、視線の高さが同じにしたりすることが必要である。

姿勢, 身振り・手振り

- ✓ ソーシャルワーカーの姿勢一つで、面接場面の緊張感や柔和感が変化する。
- ✓ 身振り・手振りは、言語メッセージが適切に伝わるために重要な役割を示すが、時にはクライアントにネガティブな印象を与えてしまう場合もある。

非言語的面接技法

位置と距離

- ✓ 真正面で向き合うよりも、正面を外したり、90度にしたり、着席する位置をズらすことで自然と視線を外しやすくなる。クライアントへの圧迫感を与えずに済む。
- ✓ 心地よい位置や距離は、文化的背景や相手との親密さ、感情によって異なるため、ソーシャルワーカーはクライアントの個別性を踏まえて調整する必要がある。

沈黙を取り扱う

- ✓ クライアントが沈黙した背景によって、ソーシャルワーカーの応答は異なる。
- ✓ 基本はクライアントが話し始めることを待つが、沈黙が長く続く場合にはクライアントがプレッシャーを感じる場合もある。
- ✓ ソーシャルワーカーから沈黙を破る際には、「お話しにくいようでしたら、先ほどお話ししていた部分を、もう少し詳しくお話いただけますか」と話しやすい話題から再開する。

言語的面接技法

話を促す

①促す(うなずき返し・は行返し)

- ✓ あいづち(例:「ふーん」、「なるほど」)は、姿勢や態度(例:うなづく)と同時に用いることで、クライアントの話を促す技法となる。
- ✓ 短い応答であるが、クライアントの話す内容・言葉に対して「へ〜」「ほ〜」とあいづちを返すことで、『さらに話を続けていいですよ』と伝えることになる。
- ✓ 適切なあいづちにより、クライアントは『聴いてもらっている』『わかってもらっている』ということを感じる。

②繰り返す(アクセント返し・オウム返し)

- ✓ クライアントの話から鍵となる言葉,あるいは短い文章をクライアントの言ったとおりの言葉を使って繰り返して応答する。
- ✓ 繰り返すことで、『そこに興味を持ちました』『その話を,さらに続けてください』ということ伝えることになり,必要な情報へと焦点化できる。

言語的面接技法

面接を深め, 進める

①閉じられた質問 (closed question)

- ✓ 「はい」「いいえ」で答えることができるシンプルな質問で, 明確な回答を得るために用いられる質問 (例: ご飯は食べましたか)。
- ✓ 答えが限定された質問も含まれる (例: お茶とコーラどちらにしますか)。
- ✓ 短時間で必要な情報を得るために有効な質問である。一方で, 答えを限定してしまうために相手が話したいことを十分に話せない可能性あり, 話の内容も発展しにくい特徴がある。

②開かれた質問 (open-ended question)

- ✓ 英語のHow, Whatに当たる質問であり, クライアントが話したいことを自由に話すことができるため, 多様な情報を得ることができる (例: どのようなお加減ですか)
- ✓ 相手の関心ごとを知ることができる一方で, 質問の意図が伝わりにくかったり, 相手が答えにくかったりする場合がある。

→①と②の質問を組み合わせ, 使い分けることが求められる

言語的面接技法

面接を深め, 進める

③ 言い換える (つまり返し・お気持ち返し)

- ✓ クライエントの話した「事実」や「感情」を, 簡潔に別の言葉に置き換えて伝え返す (例: 「つまり, ..ということ (お気持ち) でしょうか」)。
- ✓ クライエントは, “言い換え” を返されることで, 自分が話した内容を改めて認識し, 再検討することが促される。
- ✓ ソーシャルワーカーは, クライエントの考えや感情を適切に把握・共有することができる。

④ 要約する (つめあわせ返し)

- ✓ クライエントの話をまとめて, 整理して伝え返す (例: 「ここまでの話を整理すると...ということ...があり今にいたっているのですね」)。
- ✓ 面接内容を明確にして, 次の段階に進める (例: 「つまり, 奥さんは...と仰っていてサービスには抵抗があるということですね。それを踏まえて, 息子さんはいかがでしょうか」)。
- ✓ 面接の終了時に, その日の面接内容を要約することで, 次回面接へとつなげやすくなる。

言語的面接技法

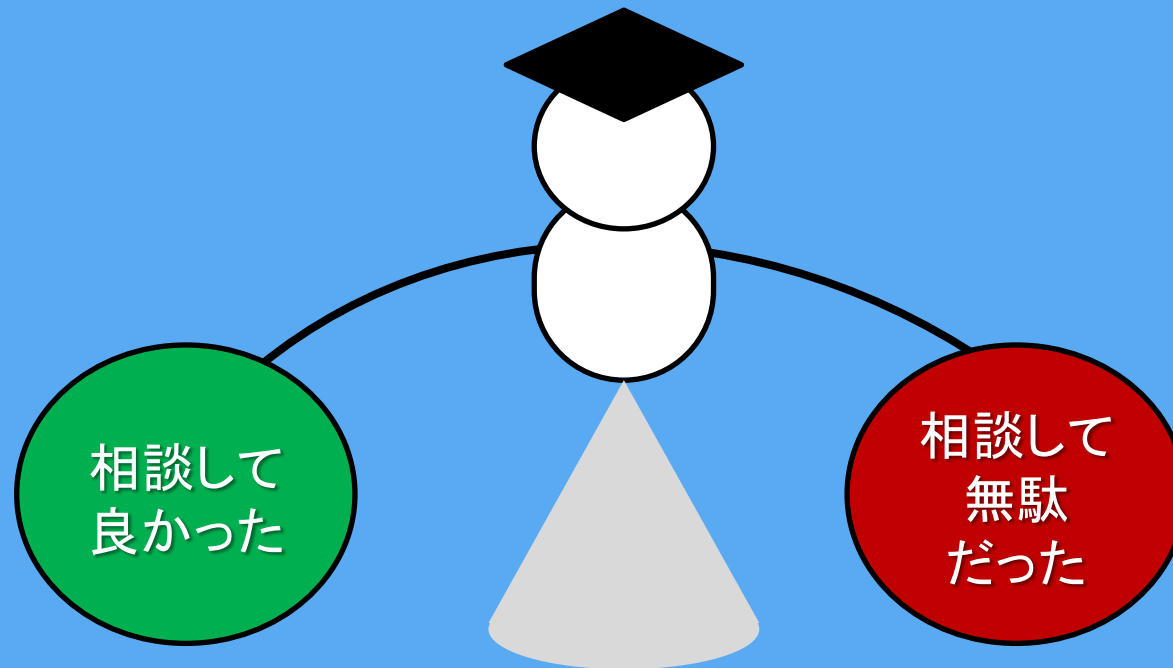
面接を深め, 進める

⑤クライアントの感情をつかんで応答する

- ✓ クライエントの感情を敏感に感じ取り, ソーシャルワーカーにはどのように感じ取られたかをクライアントへ伝え返すことで共感的態度を示す(例:「・・・と感じられたのですね」)
- ✓ クライエントから「いいえ, そうではないんです」と返答される場合もあるが, 「それでは, どのようなことを感じていらっしゃったのでしょうか」と問い直す。
- ✓ ソーシャルワーカーからの応答により, クライエントは自らの感情をより深く認識することができる。
- ✓ クライエントが子どもの場合, 「・・・は悔しかったんだね」というフィードバックが感情教育になり, 自分の内側で生じている感覚(感情)に名前をつけることが可能になる。

面接技法は, クライエントの利益のために, 継続した支援を受けてもらうために実践される。クライアントが面接によって, 何かを得られたと感じた時に, 次の支援につながってくれる。面接技法は, 支援者がクライアントを操作するためではなく, クライエントの利益のためにあることを忘れてはならない。

クライアントにかかわる上での姿勢



- 相談して良かった経験を積みば積むほど、援助希求行動を取りやすくなる。
- 相談しても無駄だった、分かってもらえなかった、たらい回しにされた、という経験をすると、援助希求行動は取りにくくなる。
- 「相談して無駄だった」経験から、一人で抱え込む人たちに対して、支援者が『相談しない（できない）人』『非自発的・非協力的な人』とラベリングして良いのでしょうか。

クライアントにかかわる上での姿勢

非自発的・非協力的な人



援助希求力が弱い人たち



制度の狭間にいる人たち
バルネラブルな人たち

- 直面する課題の程度にかかわらず、援助を要請しない、要請できない人々。
- 適切に助けてもらえた経験がない、社会から孤立している等から、援助希求が行えず、さらなる孤立につながる悪循環が生じる。
- 専門職としては、本人からの求めがないことからかわりが取れないと判断されやすい。
- サービス利用の意向が乏しく、援助が難しい人たちであり、脆弱性を生み出す社会環境的側面の変容が重要になる。

クライアントにかかわる上での姿勢

両価性（アンビバレント）

「解決の行動をとりたい、けど不安で、億劫で、まずはこのままでいいや」というように、変化に対して両方の感情が同居している状態を意味する。

支援者：正したい反射

指導・指示
説得
問題の直面化
許可のない情報提供
アドバイス



当事者：心理的抵抗

否認
自己防衛
回避
信頼の欠如（支援者への不信感）

誰にでもアンビバレントな状態は生じることを理解し、クライアントの“変わりたい”という気持ちと一緒に拡大していけるような姿勢が重要である。

相談支援に必要な技術

アセスメント技術

アセスメント技術の重要性

- ソーシャルワーカーが効果的に実践力を向上させるためには、アセスメントスキルの向上が必須である。

大谷京子(2013)

- 援助の要であり、効果的な援助はアセスメントにかかっている。

中村佐織(1994)

- アセスメントが有効なら、介入が成功する可能性が高くなる。

Milner & O'Byrne(2002)

- アセスメント力のなさは、ソーシャルワーカーの存在意義を問われる。

原田聖子(2010)

アセスメントとは何か

～ソーシャルワークアセスメントをもとに～技術の重要性

クライアントとソーシャルワーカー，そして周囲の状況を理解するためになされる，クライアントとソーシャルワーカー双方でなされる**情報収集と分析のプロセス**である。ソーシャルワーカーは専門的価値に基づき知識を導出し，クライアントは固有の経験値に基づき，**協働して目の前の現実を解釈するプロセス**である。

- サービス主導アセスメント（サービス受給資格の有無を判別するため）ではないことに注意が必要である

アセスメントの視点・技術

エコロジカルモデル(生態学モデル)

ソーシャルワークのアセスメントにおける基礎的な視点・・・

人と環境, その関係性(相互作用)の全体的な捉え方から問題(現象)を見立てる視点

- 問題(現象)を「人と環境の関係性の不適合(バランスが崩れた状態)による結果」と理解する。この不適合の背景を見立てるために、人・環境における主要な情報を収集し、その関係性を評価・分析する。
- 「**環境のなかに存在する人**」と捉え、環境との関係が変われば人も変わり、人が変われば環境も変化する、という**円環的な理解**が基盤にある。

見える部分
(生じている現象)

主訴・生活問題

見えない部分
(背景要因)

バランスが崩れた結果
(交互作用)

【人:クライアントの側面】

Bio: 生物的・身体的側

Psycho: 心理的・精神的

Social: 社会的・環境的

※個人のストレングス

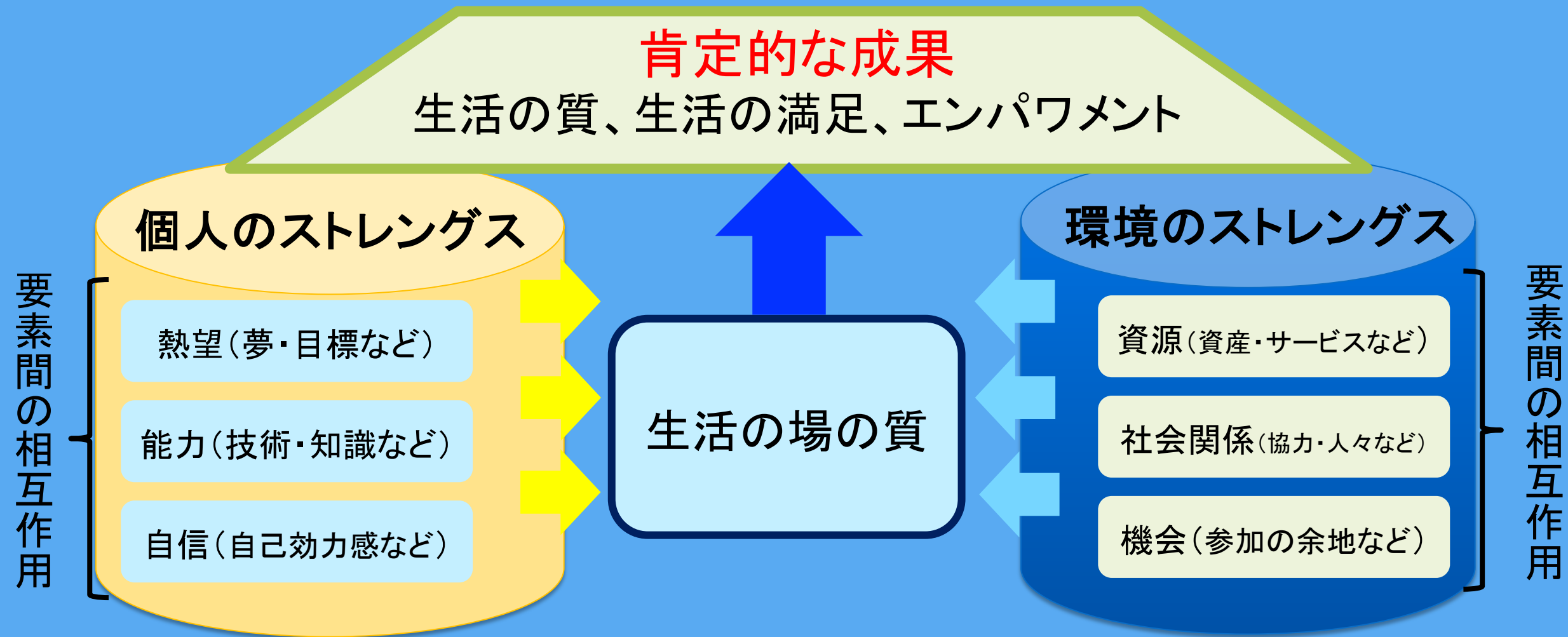
【取り巻く環境の側面】

社会環境: 家族, 地域, 所属
(クライアントの環境には, ソーシャル
ワーカーも含まれる)

※環境のストレングス

アセスメントの視点・技術

ストレングス視点・ストレングスアセスメント



個人のストレングスエピソード

環境のストレングスエピソード

アセスメント

個人面

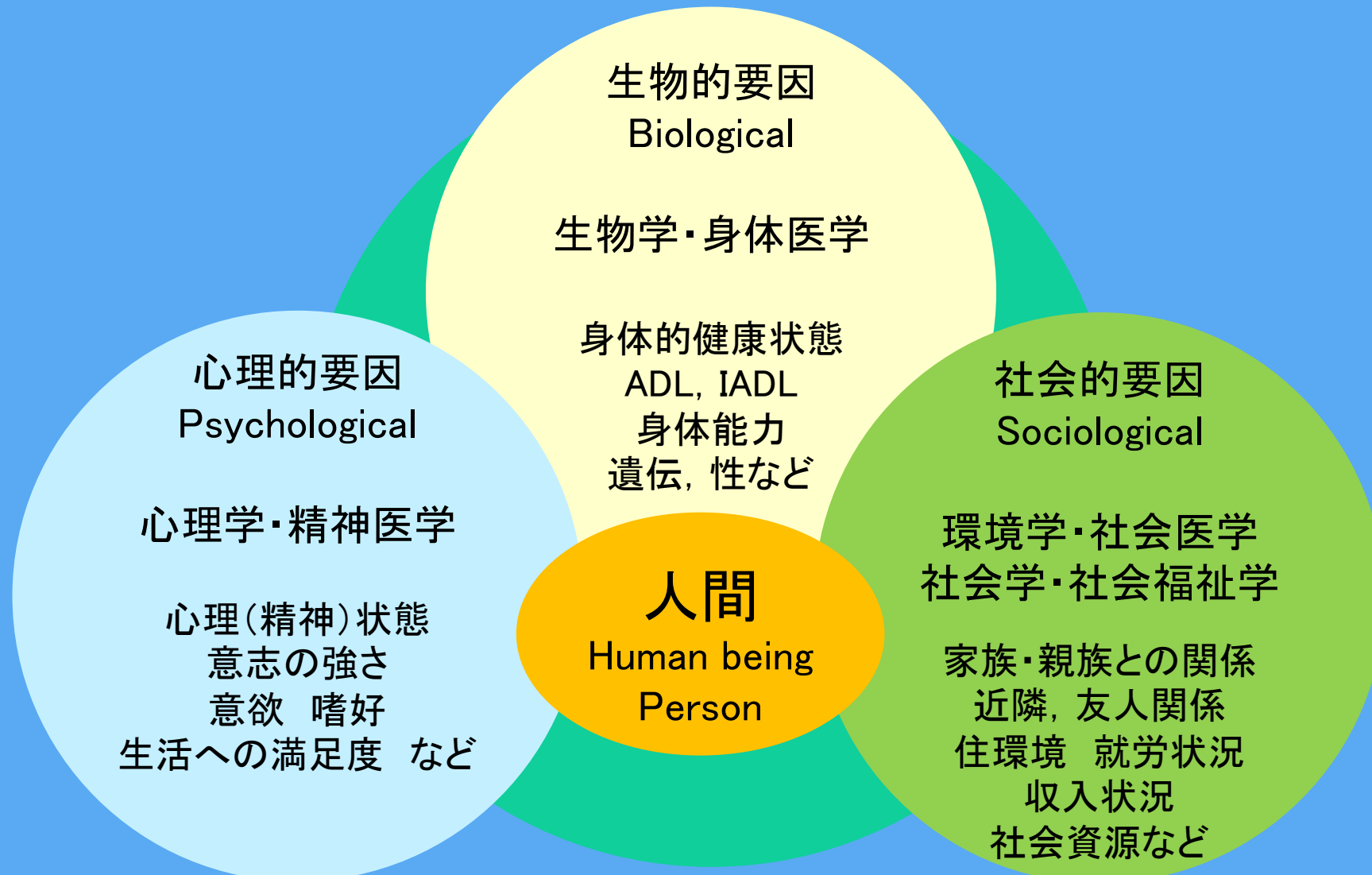
環境面

- 目標・やりたいことが明確にもっている。
- 依頼すると、引き受けることを前提に対応を考えてくれる。
- 発想が豊かである。
- いつも部屋が片付いて、整理整頓を心がけている。
- ○○について、熱心に勉強している。
- ○○について、いろいろな知識と経験を持っている。
- 周りに気遣いができる。
- 行動に移すことは早い。
- 作業スピードも早く、その作業内容も周りから認められるものが多い。
- 体調に留意して、睡眠時間を確保しようとしている。
- 漫画・アニメから元気もらっている。
- 家族のご飯や弁当をつくられている。
- 優しさと丁寧さ
- きれい好き
- 相手のことを考えられる、自分も他者も気遣える
- 目標があり、目指す方向が明確である
- 関心があることを有している
- 発想力・行動力がある
- 好きなことがある

- ○○について、勉強できる資料をもっている。
- ○○について、一緒に働いてくれる仲間がいる。
- 作業や仕事を依頼してくれる機関・団体がある。
- 作業や仕事に打ち込める場所がある。
- 作業や仕事に打ち込めることを理解し、サポートしてくれる家族がいる。
- 肯定的にフィードバックをしてくれる仲間がいる。
- 頼りにしてくれる仲間がいる。
- 職場がさまざまな配慮をしてくれる。
- 漫画・アニメを読む時間がある。
- ゆっくり過ごすことができる家がある。
- 自由な働き方が認められる職場環境がある。
- 関心があることに打ち込める資料・時間・場所がある
- 成果を示すことができる機会がある(機会を提供してくれるつながりをもっている)
- Aさんを理解してくれる職場環境
- 自分の時間をもつことができる自宅

アセスメントの視点・技術

生物・心理・社会モデル (Bio/Psycho/Social)



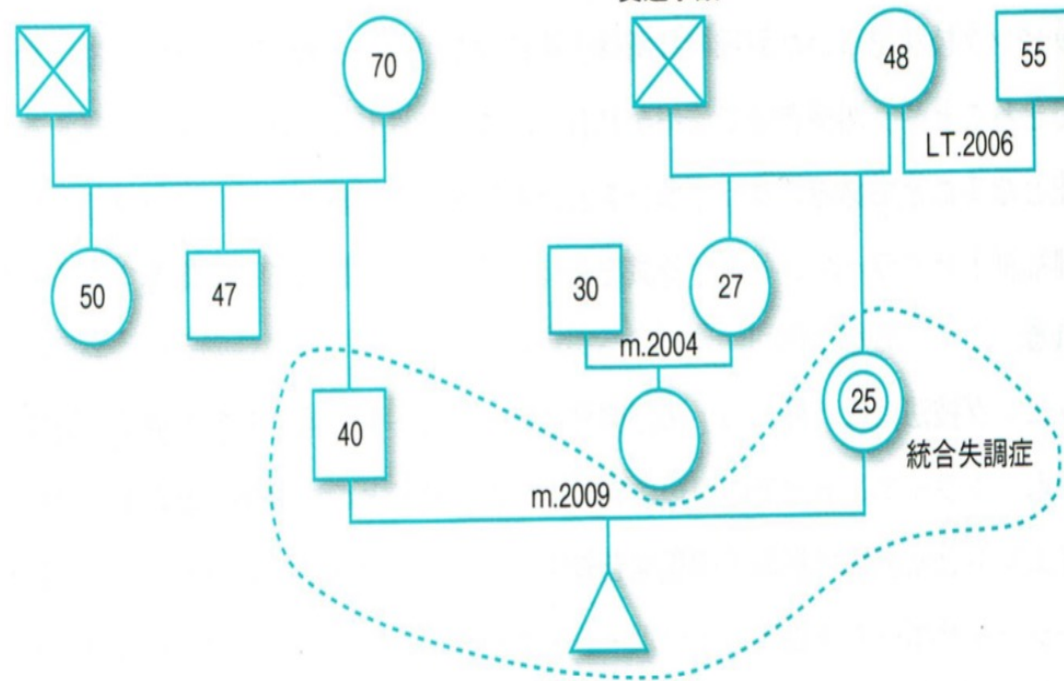
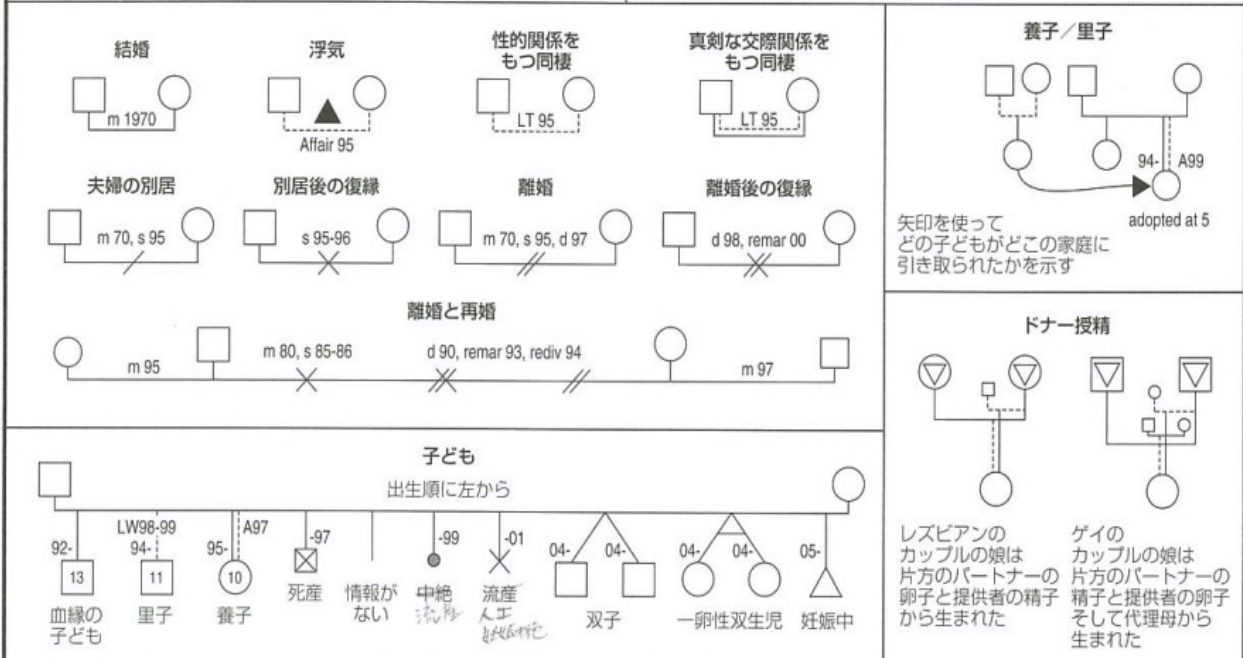
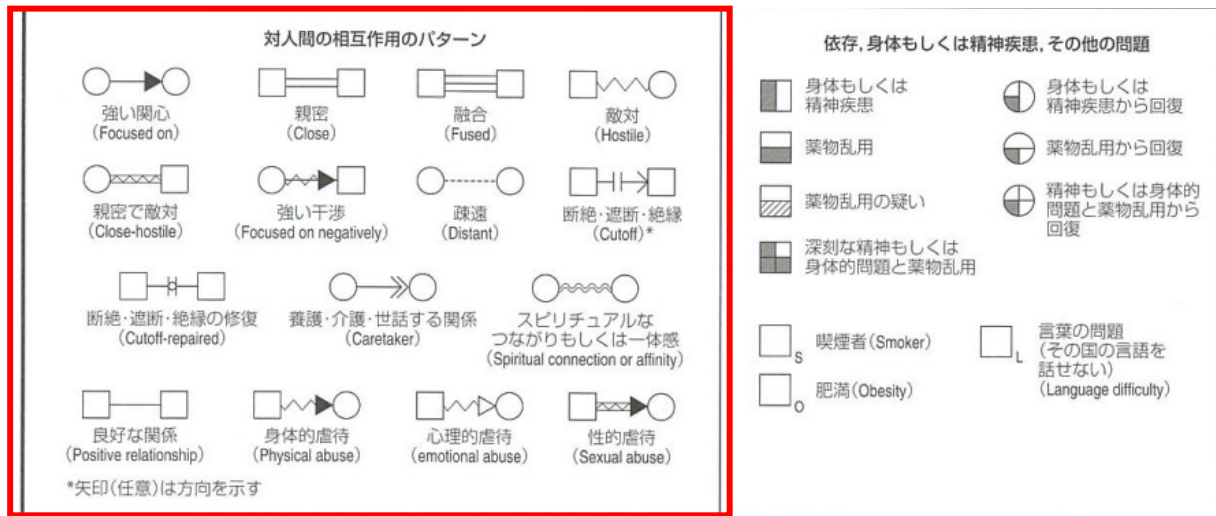
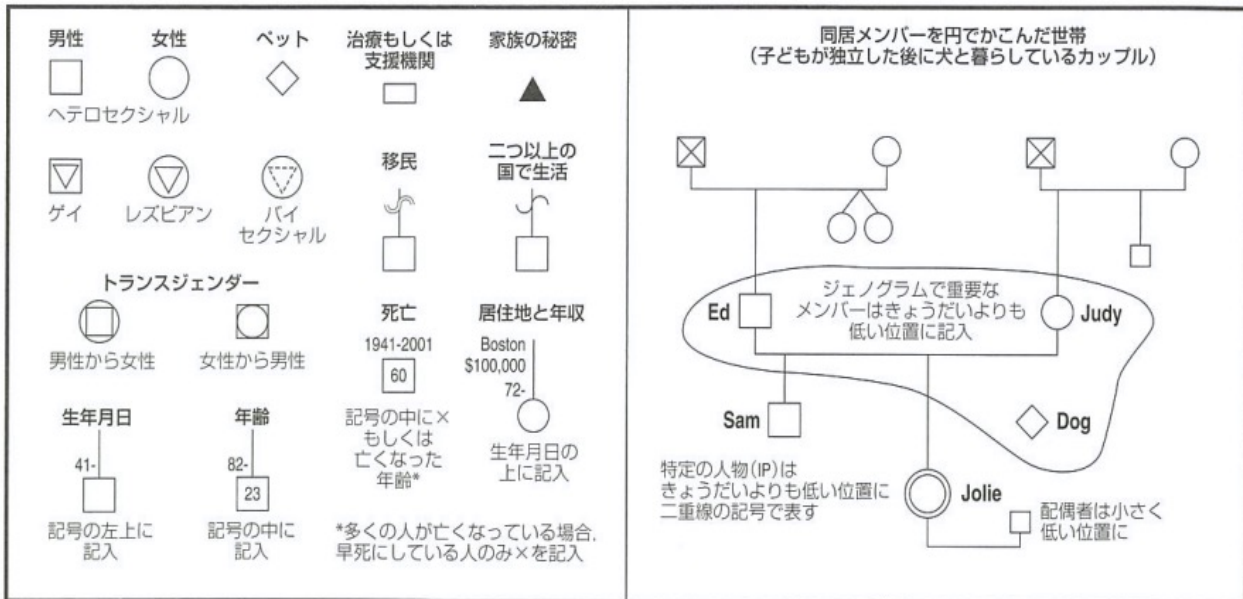
アセスメント技術

ジェノグラム (Genogram)

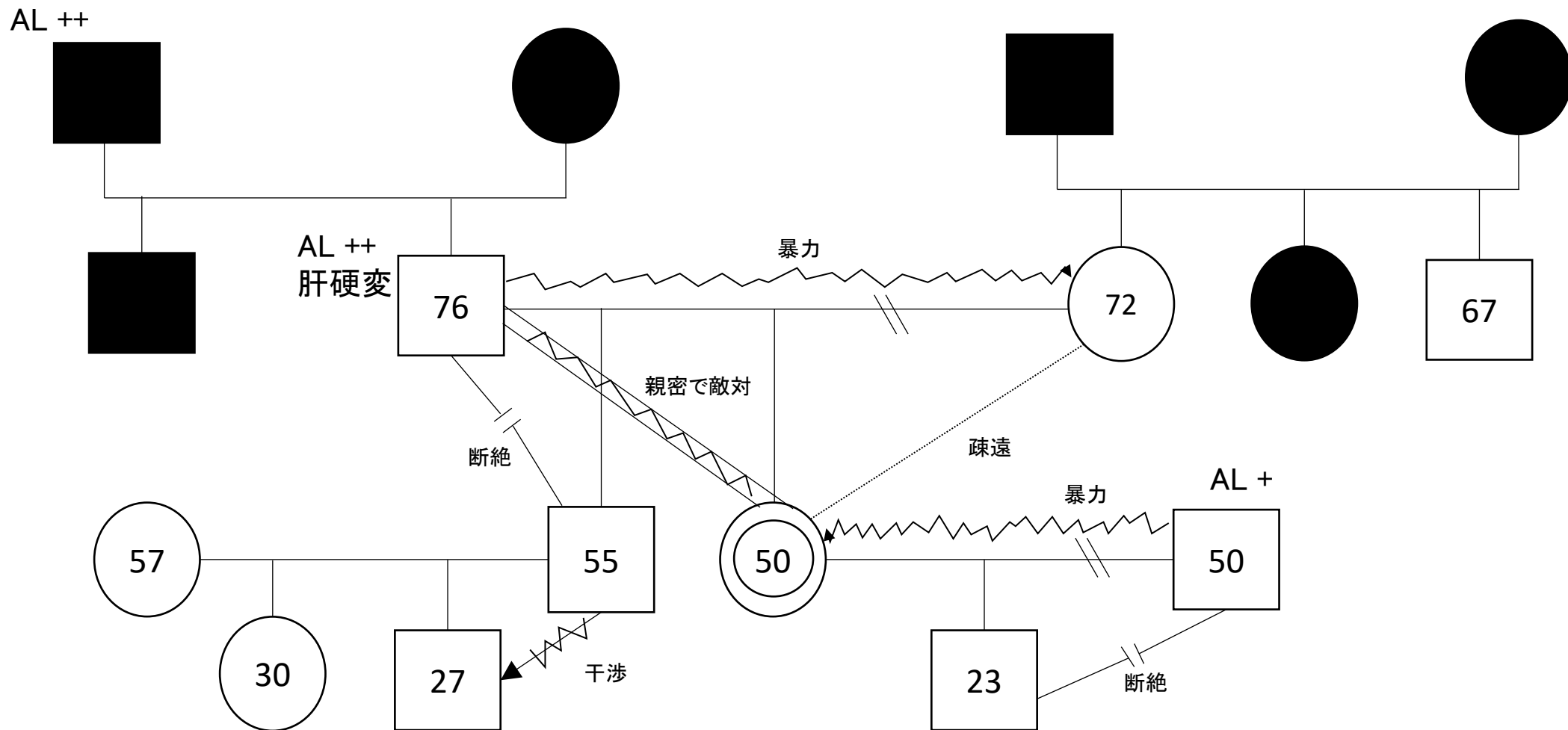
- 家族療法などで用いられる、3世代までさかのぼって家族や同居者の状況、関係性についての情報を記録する。
- 家族の構造や歴史を記号を用いてマッピングして図式化することで、相互の関係性や複雑な家族のパターンを評価しやすくなるツール・技法である。
- 支援の記録としてジェノグラムを用いることで、効率的に概略を把握しやすく、各世代にわたって繰り返される家族関係の特徴、問題等のパターンを描き出していくことに役立つ。
- 家族は人間が所属するなかで最初の、最も影響力の強いシステムであり、時間とともに変化するつながりを把握することに役立つ。

ジェノグラム表記法一覧

マクゴールドリックら『ジェノグラム 家族のアセスメントと介入』(2018)

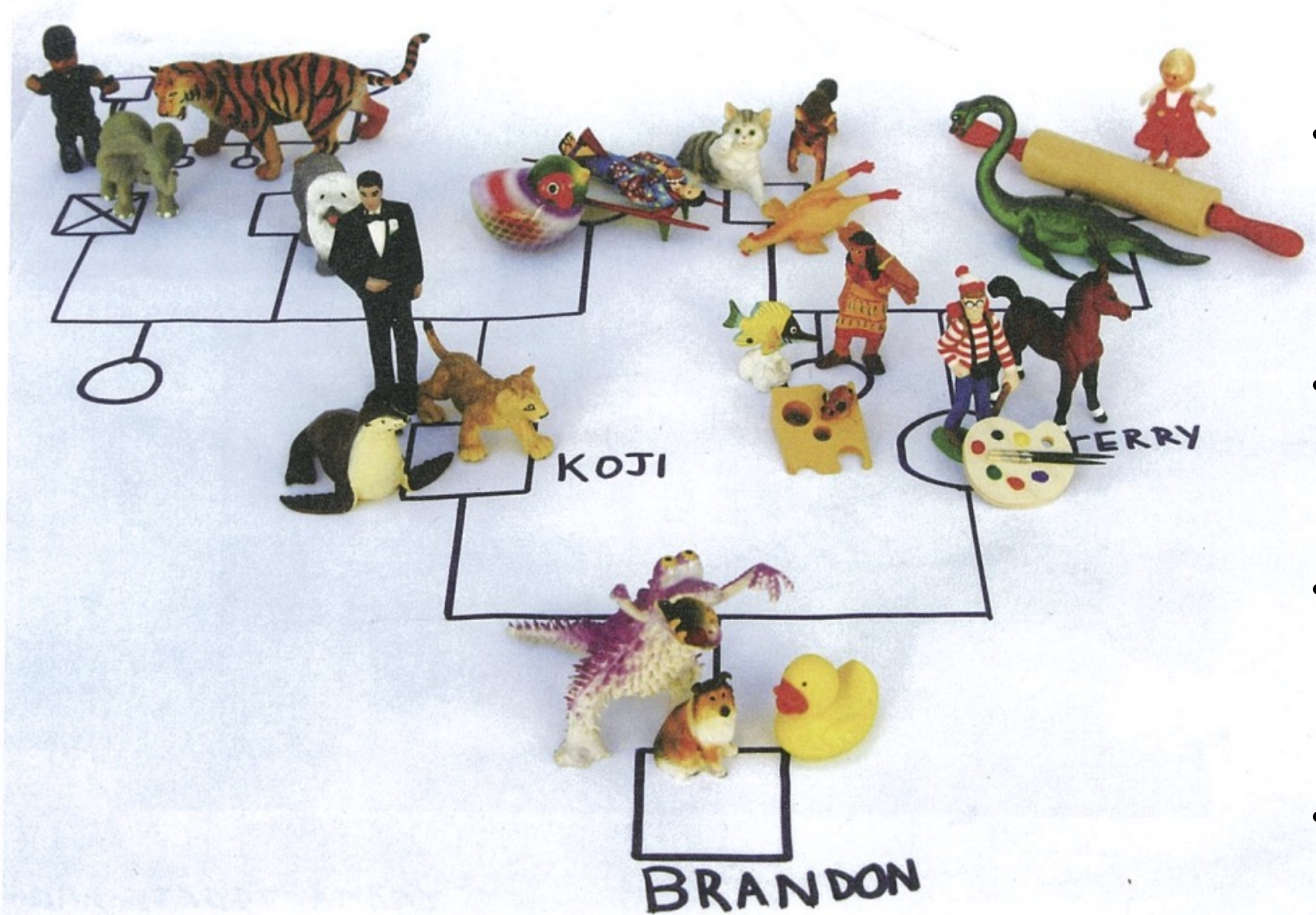


ジェノグラムによる記載例



AL: アルコール関連問題
+: 多少あり
++: かなりあり

ジェノグラムを用いた支援方法の例



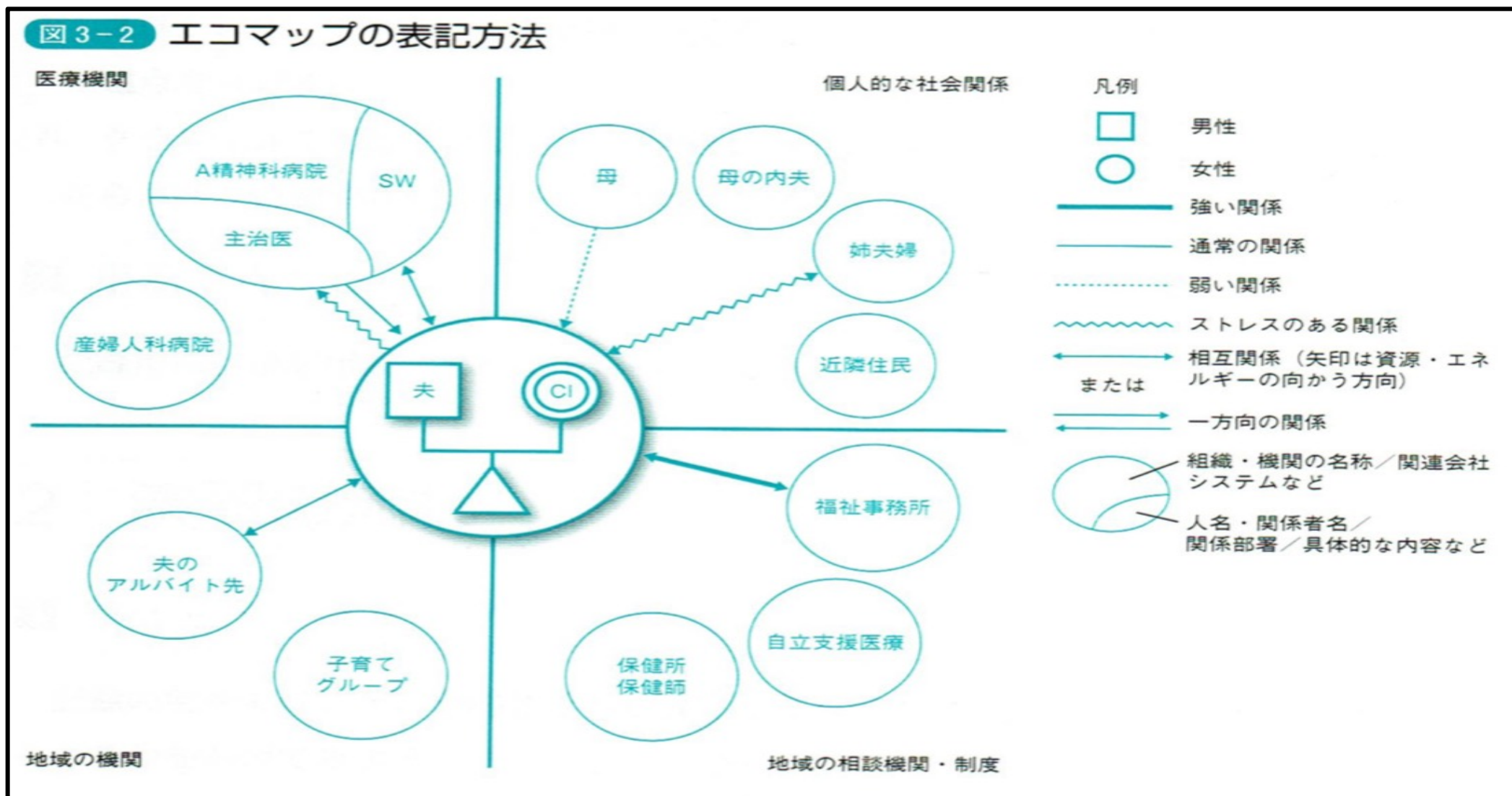
- 家族とともにミニチュアの人形、動物、物から、それぞれの家族メンバーを選ぶ。
- 左の写真は、父親・母親・息子の3人が、自分を含む家族に対してどのようなイメージしているかを自由に選び出し、ジェノグラムに配置したものである。
- そして、選んだ理由を話し合うことで、それぞれが抱えている葛藤や関係性を評価することにつながる。
- 当然、クライアントが一人の場合でも家族状況を把握する方法として有効である。
- どのような支援現場、支援対象に活用できるだろうか？

アセスメント技術

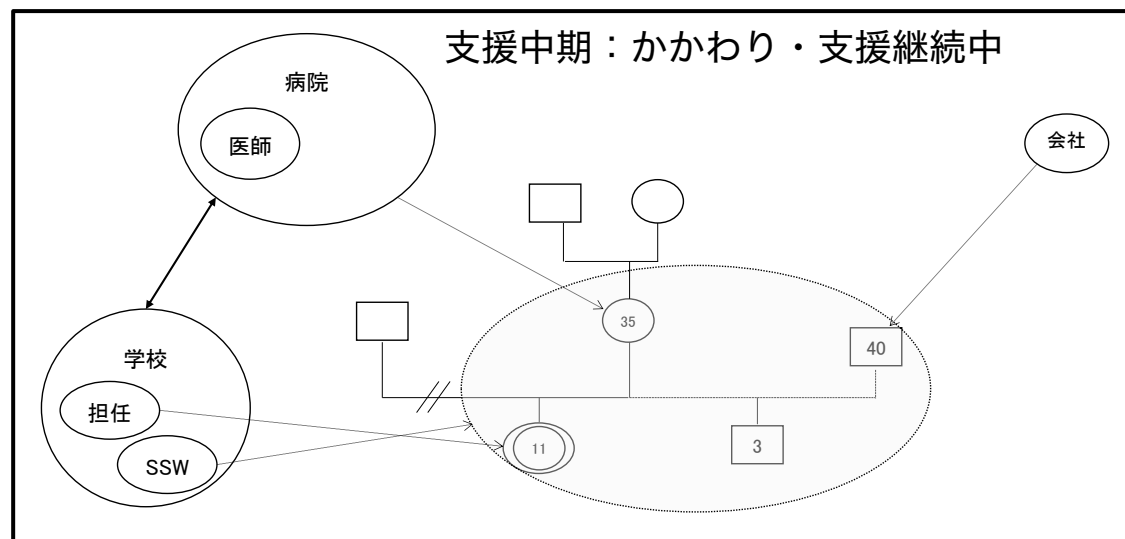
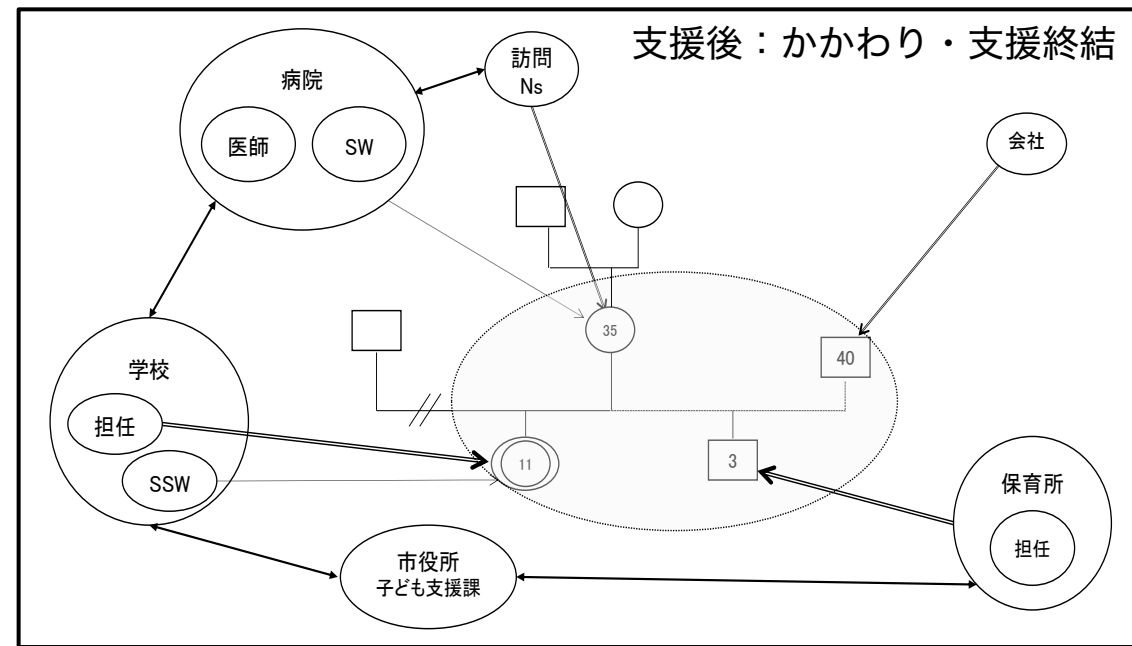
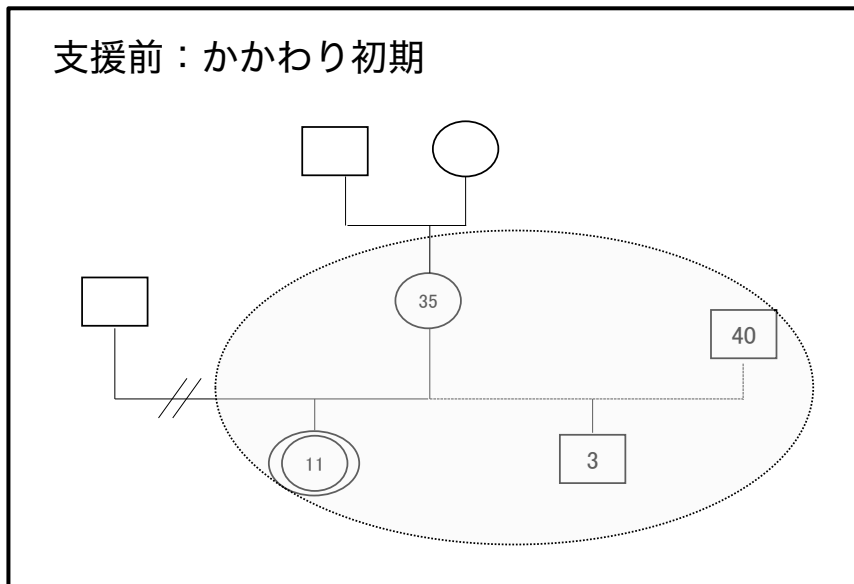
エコマップ (Ecomap)

- 利用者と家族、さまざまな社会資源との関係を地図（マップ）のように図式化したもの。「生態地図」または、「社会関係図」とも呼ばれる。
- 「エコマップ」は、利用者と利用者を取り巻く環境を一体的に捉えるツール・技術であり、家族にどのような支援ネットワークが関係しているのかを理解するために用いられる。
- 福祉サービスの充足状況や、その他の社会資源との関係性においてみられるサービスの量・質の状況などを把握することができる。また、まだ活用していないが活用可能性がある資源を記入する場合もある。

エコマップの表記方法



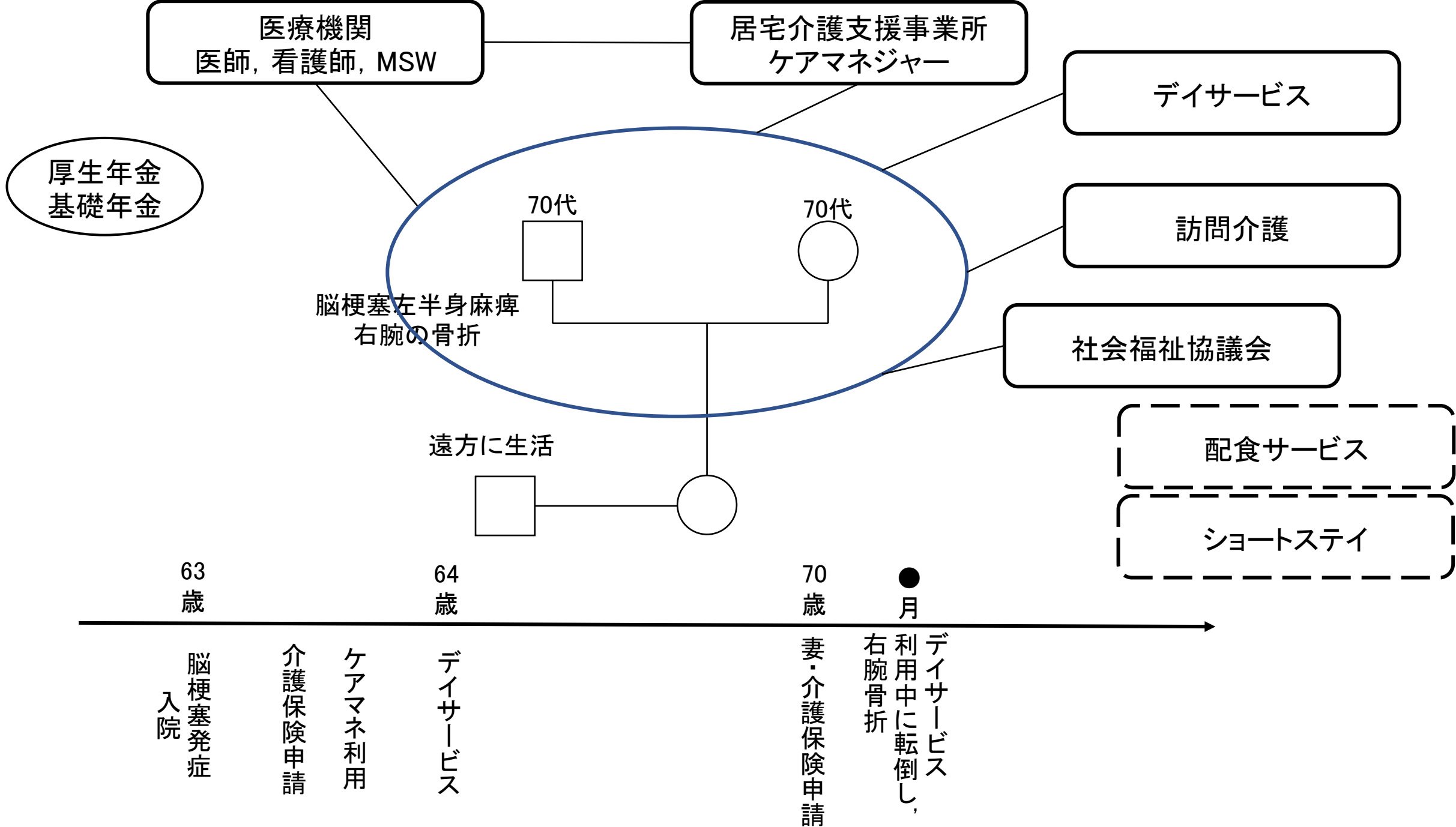
エコマップの活用方法例



アセスメント技術

生活史・タイムライン

- 利用者が生まれてから現在までの歴表であり，語られる出来事を左から右に時系列に表示していく。
- 利用者が支援を必要とする状況になる前にどんな生活をしていたかを知るのに有効なツールである。
- 利用者自身が自分の歴史を振り返ることで，自身のストレングスや過去のコーピングの実績を再認識し，人生を肯定的に捉えられる機会にもなりうる。



相談支援に必要な技術

介入技術

意思決定支援について

日本相談支援専門員協会 行動指針

意思及び価値の尊重

私たちは、すべての利用者について、固有の意思を有し、自己決定可能なひとりの生活者として理解します。利用者が多様なかたちで表現する意思を尊重し、その背景にある多様な価値を受容・共有し支援を行います。

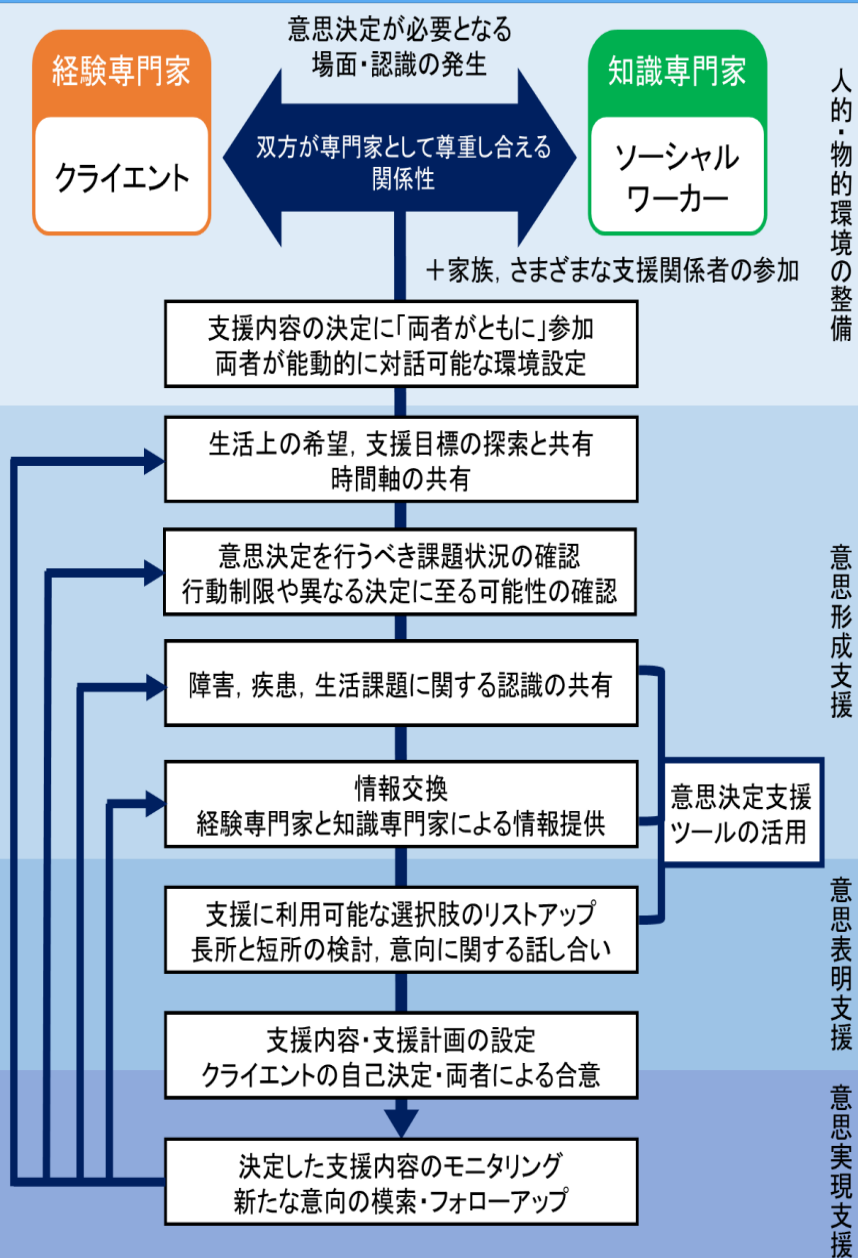
障害者の権利に関する条約 締結国（日本）への勧告

法律の前にひとしく認められる権利（第12条）

全ての障害者の自律，意思及び選好を尊重する支援を受けて意思決定をする仕組みを設置すること。

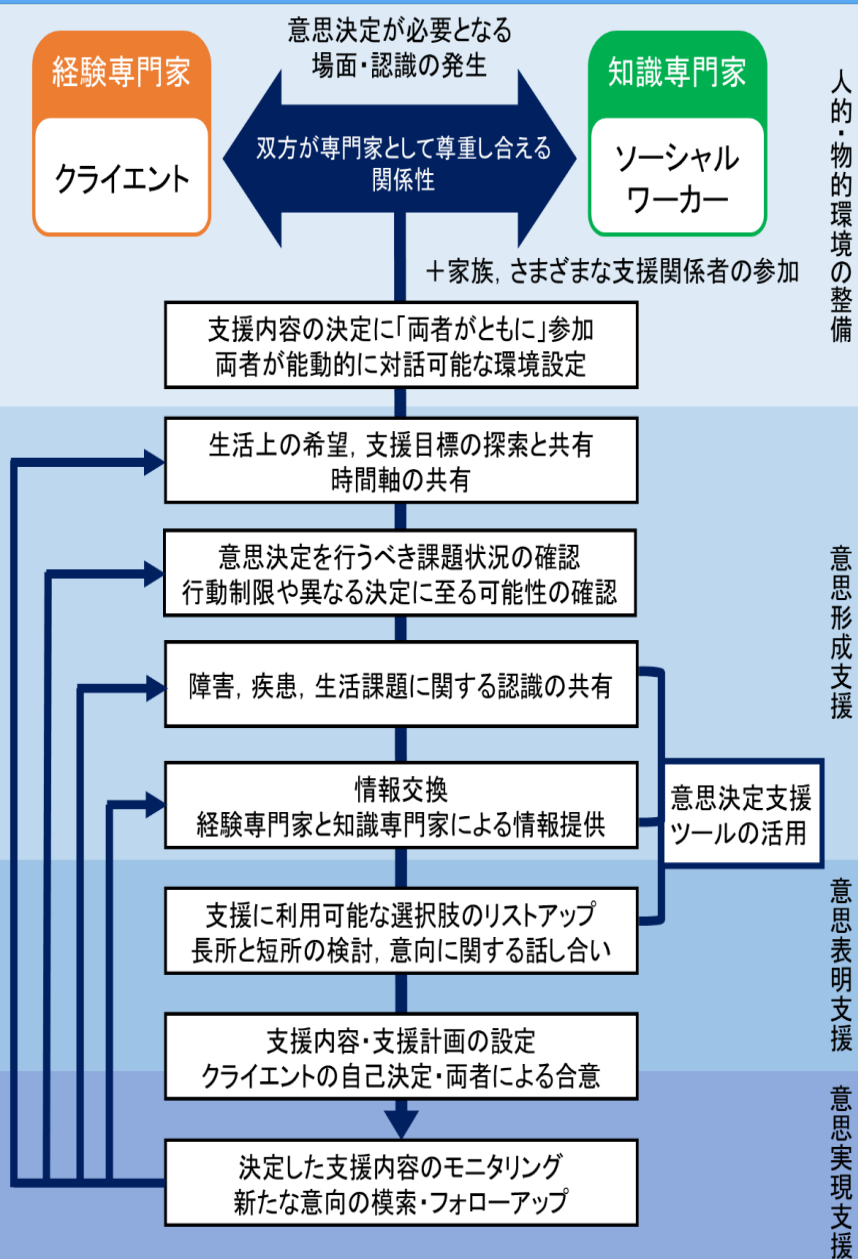
- 「代行意思決定」から「支援つき意思決定」へ，「本人の最善の利益」から「本人の意思及び選好」へ，というパラダイム転換が求められている

意思決定に向けたかかわり



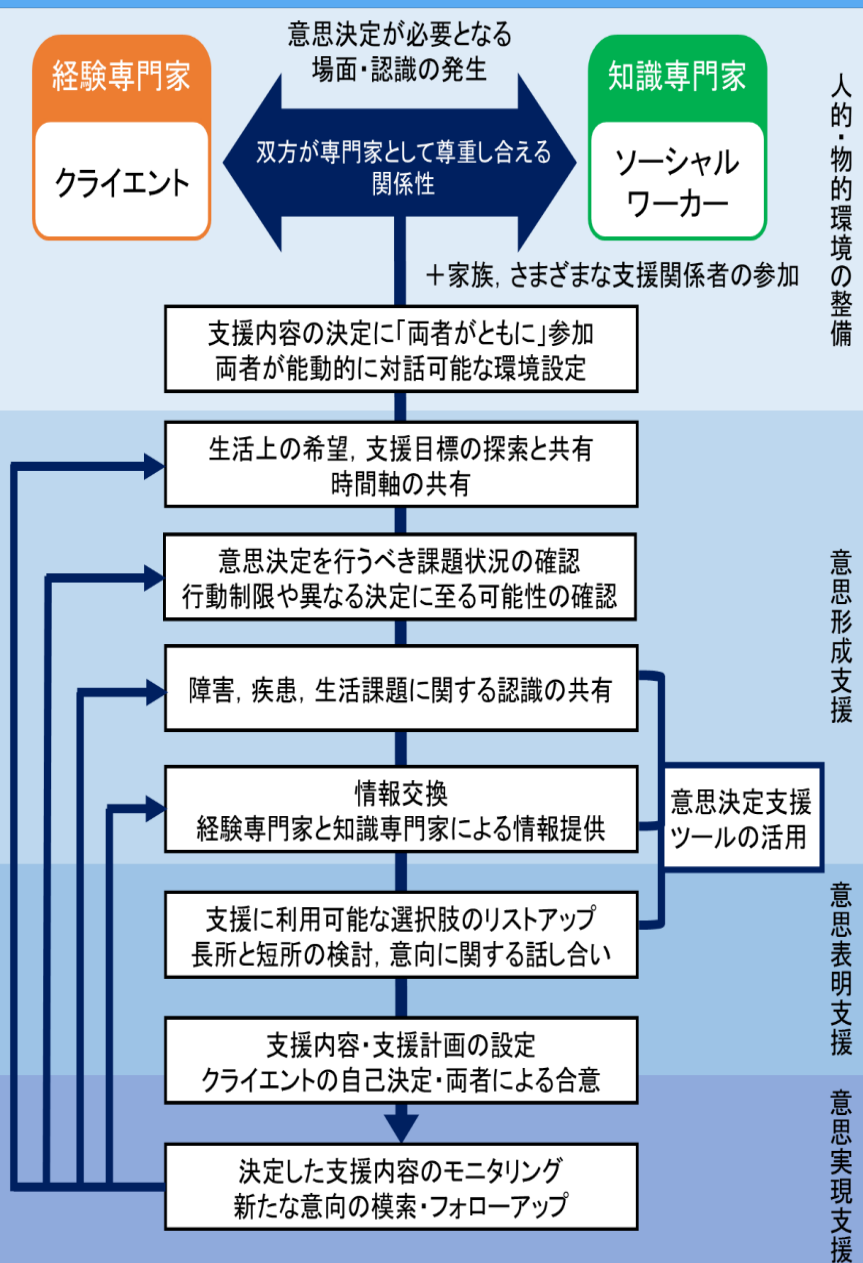
- ① そもそも「支援する・される」というパワーの不均衡が支援場面では生じやすい。SWrが留意していても、CLの認識が関連するため、一層のSWrの姿勢が重要になる。
- ② CLとSWrはそれぞれが専門家として、対等性を意識して意思選択・意思決定過程に参加する。
- ③ CLとの関係性ととともに、CLが緊張・不安を感じずに参加できる人的・物的環境の整備（配慮）も重要になる。
- ④ CLの心理的安全性が高いと、CLの選択・決定への主体性を高めることが期待できる。

意思決定に向けたかかわり



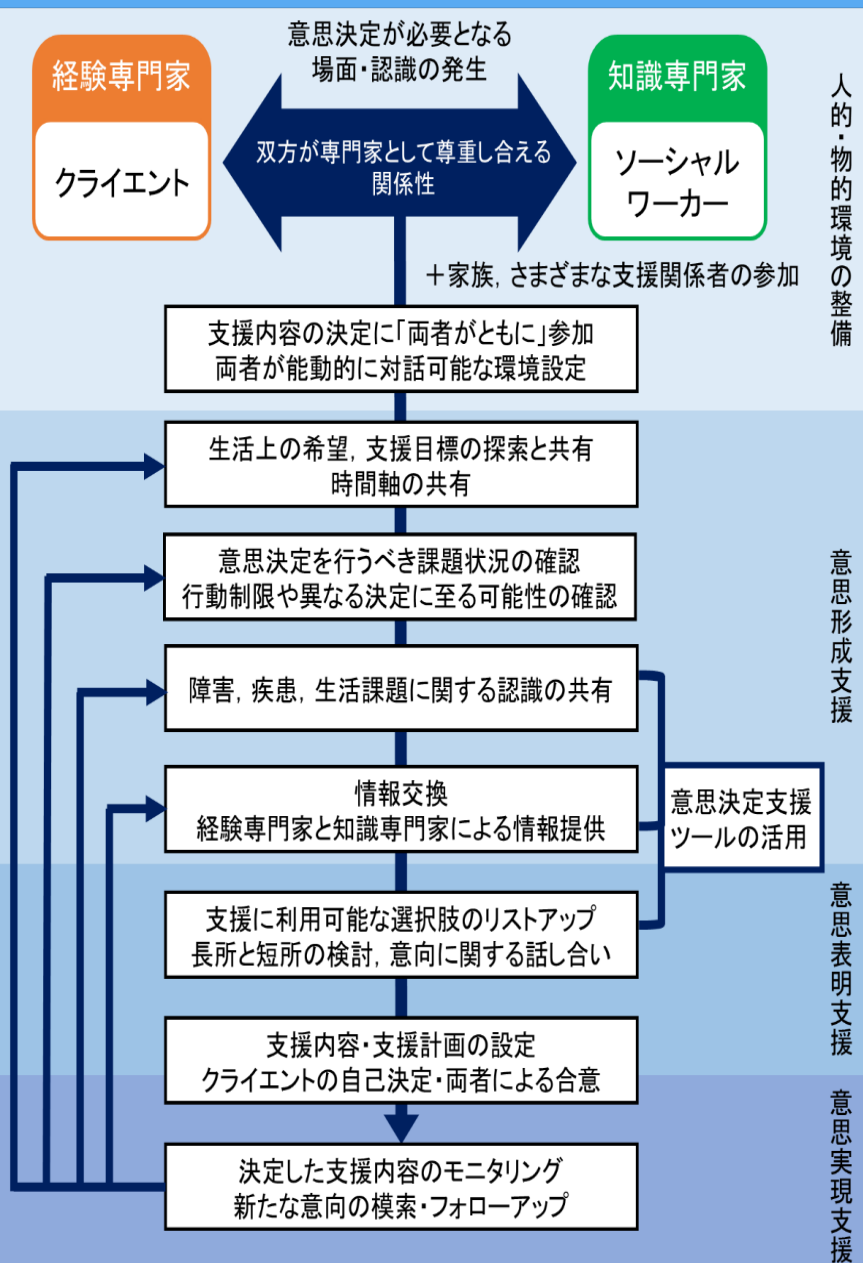
- ① CLが捉える社会的ゴール（パーソナルリカバリー）や認識している問題とは何か，その背景を共有する。
- ② 「時間軸の共有」は，希望・目標を探索する上でCLとSWrで視点がズれる場合がある。
- ③ 問題状況の確認，課題への認識を共有する際，CLのアンビバレントな状態に陥ることを理解し，CLの課題意識を広げていく。この時，SWrにはCLの希望とは異なる支援内容に至る可能性があることも説明する。
- ④ CLは自らの経験や考えといった主観的な情報と，SWrはエビデンス等を踏まえた客観的な情報を出し合う。

意思決定に向けたかかわり



- ① 意思決定支援ツールは、CLの意思形成及び意思表示のために必要に応じて活用する。
- ② CLのストレングス（資源）にも着目し、支援に利用可能な選択肢をリストアップし、そのメリット・デメリットを話し合う。
- ③ この話し合いから、CLの意向や好みを解釈することができる。
- ④ 速やかに意思表示される場合もあれば、悩み、話し合いを継続する必要性が生じる場合もある。
- ⑤ 話し合われた内容に対して、CLとSWr等で合意形成し、支援内容・支援計画に反映する：自己決定へ。

意思決定に向けたかかわり



- ① 意思実現支援として、CLの自己決定に基づく支援を開始する。
- ② 支援のモニタリングとともに、CLの意思の変化、新たな意思が生じていないか、CLがその模索を行えるようフォローアップすることが必要である。
- ③ CLの意思の状態に応じて、意思形成の段階へと戻り、新たな意思形成支援へと展開する。

共同意思決定：Shared Decision Making (SDM) という方法

SDMとは・・・

近年、精神保健医療福祉領域において、精神障害を抱える当事者の主体的な人生や生活のゴールを達成するために、当事者と専門職によって、その治療や支援の内容を、当事者の独自のニーズに合わせた当事者協働ケア (person-collaboration care) を提供するために注目されているアプローチである。

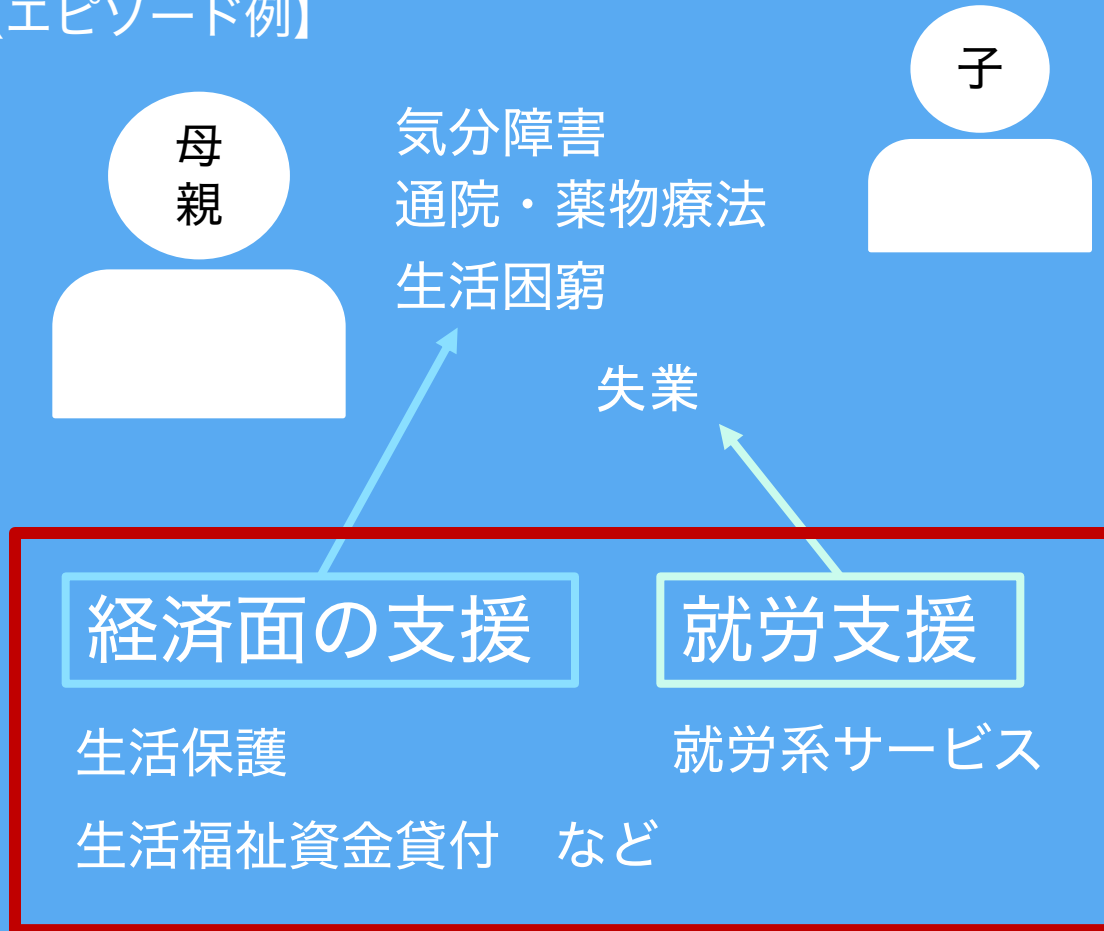
「当事者と支援者が互いに専門家（経験専門家・職業専門家）としての協働性をもとに、ケアの選択肢や善し悪し、利用者の好みや目標に関する情報を交換する相互作用的なプロセスに基づく合意によって個別的なケアの決定」と定義されている。

相談支援に必要な技術

メゾ・マクロレベルの相談支援

ミクロレベルからメゾ・マクロレベルの相談支援へ

【エピソード例】



これらだけで、相談支援と言えるのだろうか??

母親に対するサービスが提供されたとしても、精神疾患の慢性的な状態、医療継続の必要性など、家庭内の不安定な状態は続いていく。

加えて、子どもの教育上の権利を保障することも、重要な支援課題となる。

利用者・家族を総合的に支援するために連携とネットワークが求められる。

ネットワークづくり：支援ネットワークの形成

3つのネットワーク

1) 当事者にとっての、当事者がつながるネットワーク

当事者本人がつながるネットワーク、支援するソーシャルワーカーとのつながりも含まれる。

2) ソーシャルワーカー、所属機関がつながる（有する）ネットワーク

ソーシャルワーカー自身、所属機関が普段から構築しているネットワークであり、必要に応じて当事者とのネットワークとの間で橋渡し（ソーシャルワーカーはハブとなる）できるネットワークである。

3) 地域に存在する職種、組織・機関がつながるネットワーク

多様な職種、組織・機関によって地域の中で形成されているネットワークである。当事者の個別支援に第一義的に用いられることは少ないものの、地域内の個別事例の課題の蓄積や地域課題を導出する等のために活用できるネットワークである。



ネットワークを活用した「連携」

連携とは、「共通の目標を達成」するために「二人以上」の「援助者（専門性の有無に限らず）」の間で行われる「プロセス」。

情報交換・相互理解のための交流

各組織・機関の専門性や限界を理解していること、担当者同士の日常的なつながりや関係形成が重要である。実務者レベルでの定期的な交流、事例研究等を通しての顔の見える相互理解の機会が必要である。

ケア会議、事業運営等の連絡会の開催

各機関の実務者による定期的、継続的な事例を中心とした研究会の実施が必要である。個々の具体的な事例における対応について、関係機関の相互の主体性と役割を確認する。

実務者の意識向上、資質向上の機会

各機関が「枠」「ルール」にとらわれることなく、積極的に「かかわれる部分はどこにあるか」という姿勢で関与する。相互の機関における見学や実習、ピアレビューのような機会も有効である。

地域の相談窓口、連携システムの構築の場

総合相談窓口だけでなく、各機関による合同相談窓口のような場づくり、専門領域を超えたシステムづくり。

「連携」を深めるための技術

ジョイニング (Joining)

機能不全にある家族を再構造化し、治療目標を達成するために治療者が家族システム内のメンバーに仲間入りをし、家族と一緒に治療システムを形成する手段

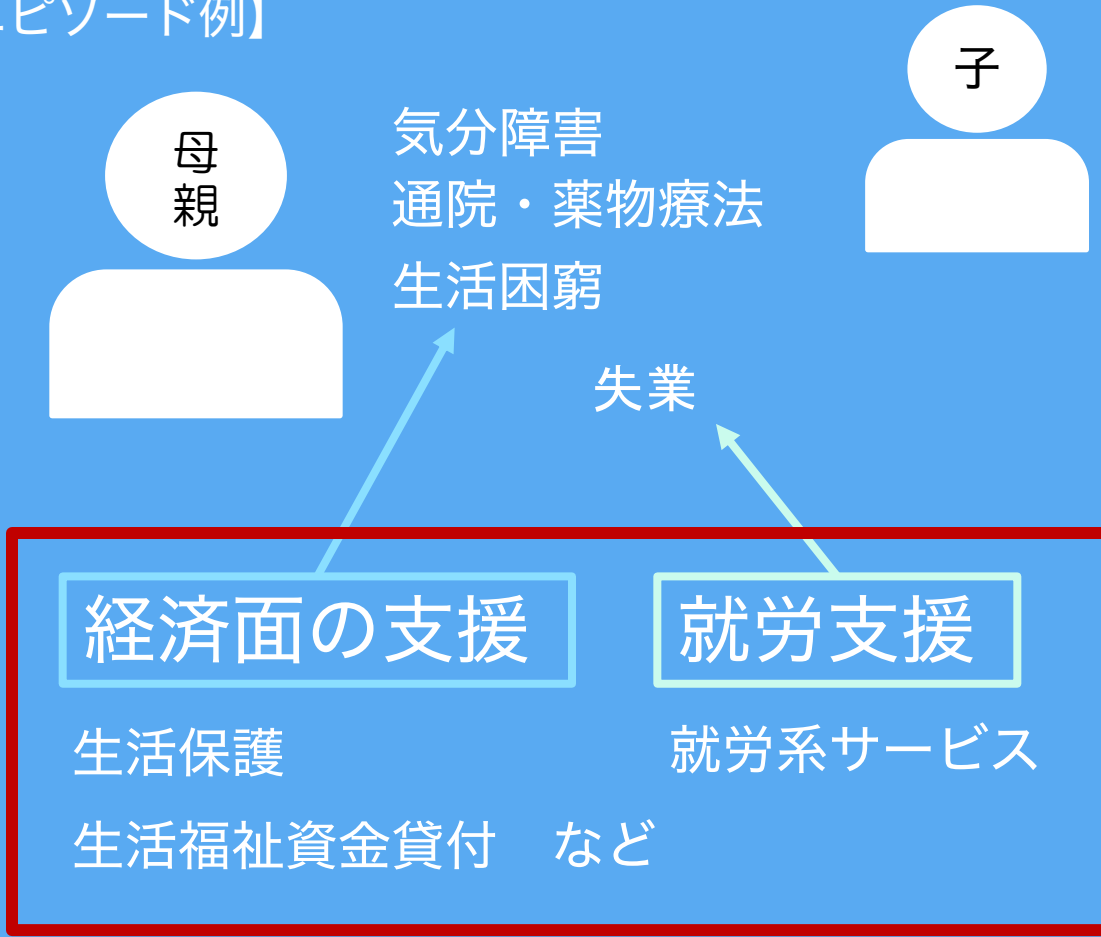


多職種・多機関との連携においても、メンバーに入れてもらうためにジョイニングを意識して関係づくりを行うことが重要である。

伴走	治療者が家族に今までどおりにコミュニケーションを続けるよう支持し、その流れに治療者がついていくこと
調節	治療者自身の言動を家族の交流に適合させること
模倣	治療者は、家族の言語的・非言語的側面を観察し、言葉づかい、比喩的な表現、感情の表現、仕草などを意識的・無意識的に模倣すること

ミクロレベルからメゾ・マクロレベルの相談支援へ

【エピソード例】



これらだけで、相談支援と言えるのだろうか??

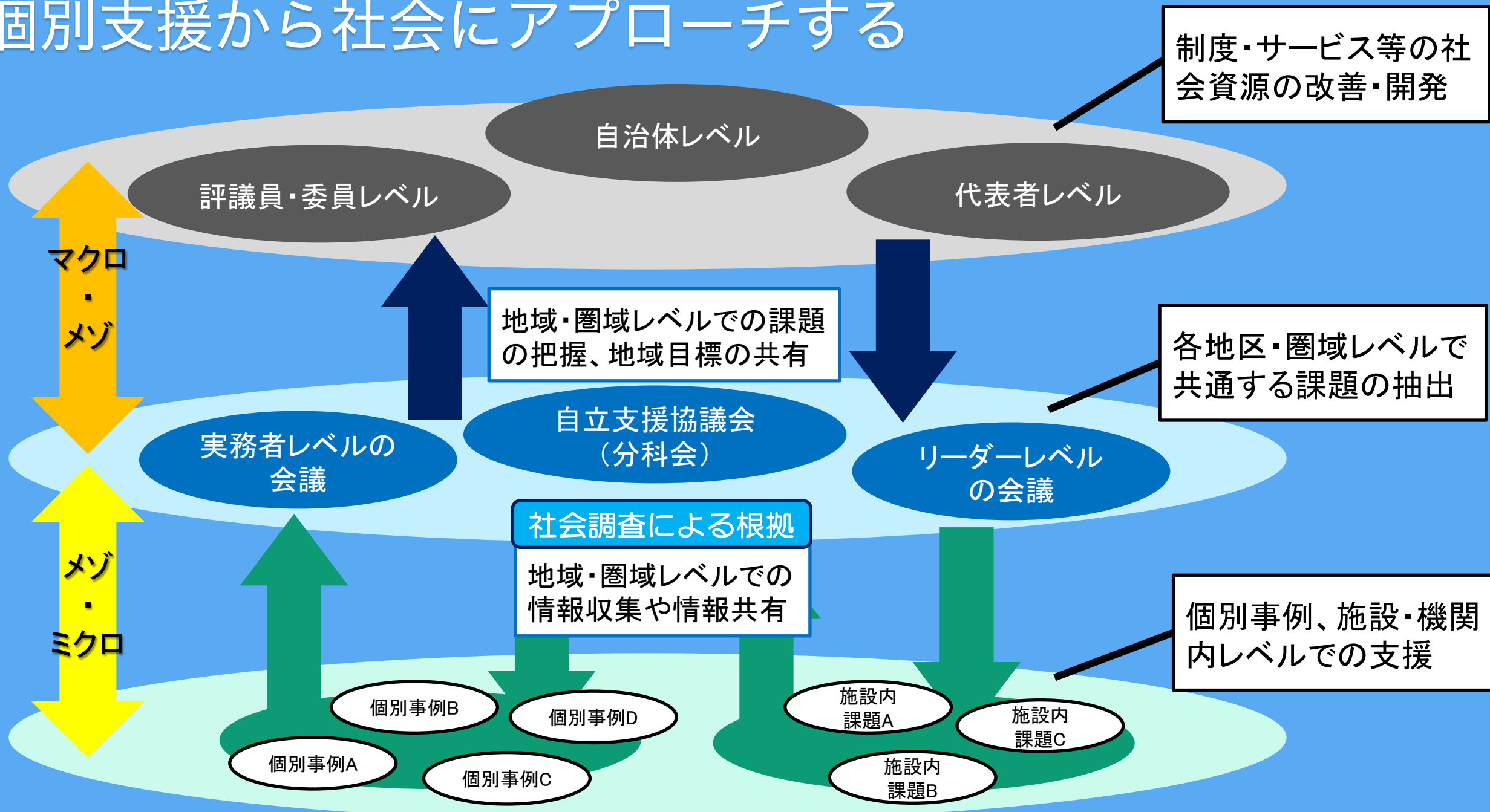
仮に就職したとしても、ワーキングプア。生活保護を受けたとしても、周囲（社会）からの生活保護に対する偏った視線。

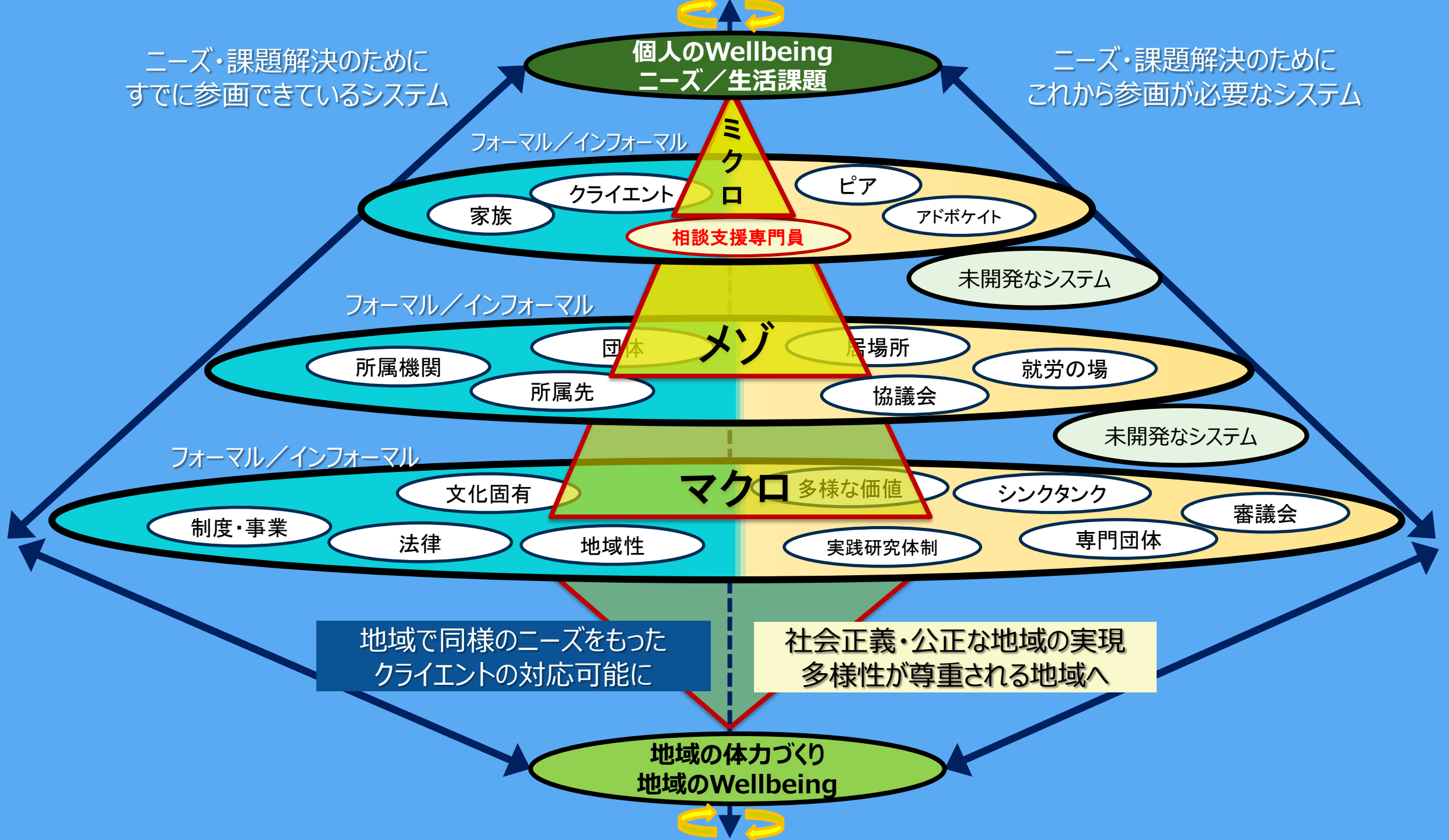
ヤングケアラーを理由とした教育機会が得られない子どもの教育保障制度の未整備。



困難状態にある人が変わるのではなく、社会が変わる（社会にアプローチ）。

個別支援から社会にアプローチする





相談支援に必要な技術

記録の技術

省察的実践に向けて大切なこと

省察的実践に向けて大切なこと：記録

「記録なくして、省察的実践なし」

自らの実践行動・振る舞いを振り返り、顧みる、またその都度行動しながら考えるためには、自らの思考と行動を記録し、言語化することで、課題に気づき、新たな実践の中で改善していくことができる。

記録は、ソーシャルワークの技術であり、資質向上のためには不可欠である。

「実践の根拠（アセスメント）を記録しよう」

どのような情報から、どのように見立てたために、どういう行動を取ったのか、自分自身の実践行動における根拠（アセスメント）を記録しましょう。

自分自身の実践を当事者や第三者に説明できるよう、自らの行動の説明責任を果たせるようにしましょう。

省察的実践に向けて：スーパービジョン、事例研究

スーパービジョンの目的は、スーパーバイザーや実施する事業所等によってさまざまですが、一般的に専門職としての実践技術が高まる・当事者や自分自身の理解が深まる、業務上のストレス低減・バーンアウトの防止等が挙げられている。

ソーシャルワーカーとしての資質向上の責務を果たす上でも、自らを成長や健康のためにも、スーパービジョンは重要な機会となる。

また、職場内・職場外における事例研究・事例検討の機会にも参加しましょう。他の参加者の視点やアイデアを学ぶ機会にもなり、事例を捉え、理解するための視野が広がります。

ご静聴ありがとうございました。

何かご意見やご質問等ありましたら、下記まで連絡してください。

東北福祉大学 狩野 俊介
s-kano@tfu.ac.jp